

令和6年2月

大学院文学研究科

金 敬玲 提出 学位申請論文
『近代中国語会話書の日中対照研究』
審査報告書

國 學 院 大 學

金 敬玲 提出 学位申請論文（課程博士）

『近代中国語会話書の日中対照研究』 審査要旨

論文内容の要旨

本論文は、日本で北京官話の教授の始まった明治9年から大正初期にかけて日本で出版された中国語関係書を調査対象として、そこに記述された能願動詞や程度表現などの中国語の文法項目と訳文に見られる日本語表現について、対照言語学的に分析、考察した研究である。本論文は第一章、第一部分三章、第二部分一章、第三部分二章、第四部分三章によって構成されている。

第一章「近代日本の中国語教育と中国語教育関連書籍について」では、近代日本における中国語教育の概要と中国語教育関連の書籍について述べた上で、先行研究を整理し、本研究の研究対象や研究目的について述べている。

第一部分は、第2章「『清語会話案内』における能願動詞について」、第3章「『清語会話案内』における兼語文について」、第4章「『清語会話案内』における“了”について」の三章で構成され、西島良爾が1900年に出版した近代中国語会話書『清語会話案内』の上巻と下巻を調査資料として中国語の文法項目と日本語との対応を検討している。第2章では、『清語会話案内』における中国語の能願動詞に対応する日本語訳の表現形式を「願望や意志を表すもの」「可能・可能性を表すもの」

「必要性を表すもの」「禁止・阻止を表すもの」の4種類に分類して検討して、当時「可能性」を意味する“会”がまだ普及していないかまたは単に『清語会話案内』に見られないだけであるのか追究の余地があると指摘している。第3章では、『清語会話案内』における主に使令意味類の兼語文44例を分析対象とし、兼語文における前の動詞が使令動詞の“叫”，“给”，“请”，“派”，“托”，“打发”の場合の日本語表現との対応状況を考察している。第4章では、『清語会話案内』における助詞“了”の使用状況及び用例用法について、動作の完了を表す動詞の後につく“了”を動態助詞“了₁”とし、出来事の実現を表す文末に見られる“了”を語気助詞“了₂”として分析を行い、動態助詞“了₁”、語気助詞“了₂”、二つの“了”が同時に現れる場合の三つのパターンに分け、中国語の助詞“了”がどのような日本語表現と対応しているのかを分析して現代中国語における“了”の用法との比較を試みている。

第二部分は第5章「明治期の中国語関係書における“会”について」の一章で、61点の中国語関係書（文法書、教科書、会話書、読本）における“会”の使用状況および用法を確認し、教科書である『亜細亞言語集 支那官話部 増訂』のみ“会”の「可能性」について理解している一方で、会話書における“会”は「能力」用法が「可能性」用法をはるかに上回っており、「可能性」用法の“会”を日本語に訳す際に「能力」用法にとらわれている部分が残っているなどの分析を通じて、当時「可能性」を意味する“会”がまだ普及していなかった可能性を指摘している。

第三部分は第6章「近代中国語会話書における程度副詞の日中対照研

究—明治後期を中心に—」、第7章「近代中国語関係書における程度表現—近代日本の日本語学習書と比較して—」の二章で構成され、程度副詞に日中対照研究の方法で分析を加えている。第6章では、日本語訳文を掲げる中国語会話書6点を調査資料に程度副詞の日中対照分析を行い、会話書に見られる中国語の程度副詞の異なり語数は25語、延べ語数は395語で、日本語の程度副詞の異なり語数は38語、延べ語数は388語であって程度副詞を使用する例文数は日中の差が見られないが、異なり語数は日本語の方が上回っていること、中国語の程度副詞で程度の小さいことを表す表現の使用が多くないこと、日本語の「非常に」の使用頻度が現代に比して多くないことなどを指摘している。第7章では、中国語会話書『官話指南』『官話急就篇』とそれらの和訳版『官話指南総訳』『官話急就篇詳訳』を調査資料に、また比較資料として和訳版のない『新華言集：普通官話』、同時期の中国人留学生向けの日本語学習書『漢訳日本語会話教科書』を取り上げ、程度表現に関する日中対照研究を試みて、当時の中国語文法書における副詞及び程度副詞の術語の確立と下位分類は日本語文法の影響を少なからず受けていたこと、会話書では中国語の口語の程度副詞はレベルが上がるとともに、程度補語の使用や程度副詞と程度補語とが共起した用例が多くなることなどを指摘している。

第四部分は第8章「近代中国語会話書における主体移動表現の日中対照研究」、第9章「近代中国語会話書における客体移動表現の日中対照研究」の二章から成り、移動表現の日中対照研究を試みている。第8章は主体

移動表現について、『華語跬歩』の「家常問答」「接見問答」から中国語文 478 例を、その和訳版である『華語跬歩総訳』から日本語文 446 例を抽出し、方位詞、前置詞と後置詞、移動動詞の三つの方面から主体移動表現の対照分析を行い、中国語の方が、移動動詞を選択する傾向が強いこと、会話文において中国語の前置詞は日本語の後置詞ほど必要性が高くないことなどを指摘している。第 9 章は、『華語跬歩』とその和訳版における主体移動表現に関する文は 450 例を上回るのに対して、客体移動表現に関する文は 180 例前後にとどまるため、『華語跬歩』『官話指南』を加えて検討し、随伴運搬型、継続操作型、開始時起動型の三つの種類に分けて日中対照分析を行い、日本語の客体移動表現では使役経路動詞が数多く使用されているのに対して、中国語の継続操作型の客体移動表現では移動動詞の使用自体が少なく、随伴運搬型の客体移動表現では会話文における随伴運搬型の移動表現は直示動詞の使用が多く見られ、直示動詞に関する日本語訳は中国語原文の影響を強く受けていることを指摘している。

第 10 章「近代中国語会話書の日中対照研究と今後の展望」は終章として本研究の議論をまとめた上で、今後解決すべき課題及び今後の展望について述べている。

論文審査の結果の要旨

近代における日本語母語話者を対象とする中国語教育のために作成された中国語会話書をはじめとする中国語教育関連書籍の語法の記述、用例に関する研究は従来ほとんどなされてこなかった。本論文は、このほとんど未開拓の分野を対象として、国立国会図書館のデジタルコレクションなどの電子テキストの公開によって近時閲覧が容易になった中国語関係書を駆使して対照言語学的に分析・考察を加えた研究であり、中国語学および近代日本語研究に新たな知見を多数提示するとともに、中国語教育学にも有益な貢献をする成果を挙げており、高く評価することができる。

第1章では、研究背景として近代中国語教育史を述べ、中国語教育と訳文の部分の近代日本語史の視点を中心とする先行研究を列挙しているが、中国語の史的変遷に関する研究史も広く踏まえることが望まれる。

第一部分では、北京官話教育の初期における優れた会話書とされる西島良爾（1900）『清国会話案内』をとりあげ、第2章では能願動詞、第3章では兼語文、第4章では“了”について分析していてこの会話書に見られる中国語の特徴をよく解明しているが、第2章における訳文の日本語の可能表現や当為表現については、例えば「勉強センケレバナライ」というほぼ明治期にのみ盛行したいかにも明治期的な形式も見られるが、近代語の研究分野には日本の近代共通語の成立過程における多様な形式の盛衰を論ずる多くの先行研究の蓄積があるので、それを踏まえ

た考察が望まれる。また、助動詞に相当する能願動詞を扱う場合は現在の中国語学では用法によっては議論が分かれて副詞に分類する見解もあるので、本章においてもこれらの副詞に相当する用法まで能願動詞に含めることは一定の評価はできるが、しかし、どの語までを能願動詞に含めるべきか範囲について規定した上で考察した方がより正確を期すことができると思われる。第3章では挙例の一部に兼語文としての認定を再考すべき例が見られ、特に使令動詞とする中に受身と解すべき例があり、議論が分かれるので兼語文の定義を先述するなど論述に工夫が望まれる。第4章の“了”については、戦後の中国語教育で詳しく指導することになった語法であり、当時は理解が進んでいなかったため、そのような語法をどのように訳していたかという観点から分析すると分析しやすかったと思われる。

第二部分の第5章は、12点の文法書、15点の教科書、29点の会話書、5点の読本における“会”の用例・記述を分析して、文法書で“会”の「可能性」について理解し、正しい例文を示しているのは『支那語助辞用法』（1902年）の1点のみで、また“会”の「可能性」用法について理解しているといえる教科書は厳密には『亜細亜言集支那官話部増訂』（1902年）の1点のみであり、会話書における“会”は「能力」用法が「可能性」用法をはるかに上回っており、「可能性」用法の“会”を日本語に訳す際に「能力」用法に囚われている部分が残っていることを解明しており、本論文中でも特に高く評価することができる。ただ“怎么会”については固定表現であるため、ここでのデータからは除外するほうが慎

重な態度であると思われる。当時はまだ中国語も少なからず変遷しており、明清の白話小説の語法の研究史を踏まえて論ずるなど発展性が見込まれるテーマである。

程度副詞における日中対照研究を行った第三部分では、程度副詞を扱った第6章で近年近代日本語の研究資料として使用実態の研究が進む中国語会話書における日本語訳文を日中対照研究の視点から研究したところが斬新である。例えば『速成日清会話独修』(1902)における中国語の程度副詞“狠”“更”“太”“最”“甚”“頂”“最為”“不狠”“略”“极”“十分”“真”の12語使用されているのに対して日本語訳では「大変」「非常に」「大層」「少し」「実に」「ごく」「はなはだ」「十分」「まことに」の9語が使用されているなど興味深いデータが示されている。このうち、中国語の副詞“狠(很)”を当時どのように日本語に訳していたかだけでなく現代中国語学の視点から、当時の中国語教師が何に気付いていなかったかという視点からの分析も今後試みればより興味深い研究となると思われる。第7章は同時期の日本語学習書における程度副詞と比較したもので、前章と対をなす研究である。

第四部分では移動動詞の日中対照分析を行い、第8章で主体移動表現、第9章で客体移動表現について考察しているが、このなかでは主体移動表現の分析により研究の意義が認められる。ただし、「経路動詞」として挙げる“上”“走”が妥当かどうか、寧ろ方向補語などを充分検討した上で再考の方が本質を捉えられるのではないかと思われる。

第10章で今後の展望が述べられているが、本論文全体を通じて未開

拓の新分野を詳細に分析し考察を加えており、今後の研究の深化が大いに望まれる。研究の目的として中国語の史的変遷の解明を目指すのか、中国語教育史を解明して中国語教育学の一助としたいのか、研究の目的を明らかにして、常に中国語教育学の最新の研究情報を踏まえた研究の発展が大いに期待できるといえる。

本論文は以上のように再考を要すべき点も含まれるが、それ以上に十章に亘って近代の中国語教育の過程で作成された中国語会話書を中心とする中国語教育関連書籍における中国語の記述・用例と日本語の訳文に対して綿密な調査と入念な考察を加えた対照言語学的研究として高く評価することができる。

よって、本論文の提出者、金敬玲は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

令和6年2月15日

主査	國學院大學教授	諸星 美智直	㊞
副査	國學院大學教授	菊地 康人	㊞
副査	國學院大學教授	針谷 壮一	㊞